

私の履歴書

ふりがな	もりした ひろみ	男
氏名	森下 宏美	
		女

(1) どんな学部時代だったか。

生まれは小樽です。高校卒業後、福島大学の経済学部に進みました。北海道には自分の居場所がないような気がして、とにかく地元を離れたかったのと、マルクス経済学をやるには福島大学がいいと先輩に言われ、行くことにしました。公害問題やベトナム戦争は高校生の胸にも深刻に響いてきて、社会科学やマルクス主義に対する関心を持つようになっていました。高校時代は悶々と過ごしていましたが、東北の小都市での学生生活はとても楽しかったです。2年間大学の寮で暮らしました。総勢120人の男子寮で、6畳間に2人が暮らすという生活でした。ずいぶん無茶なこともやりましたが、いつも誰かが誰かをかまうので、孤独を感じることはありませんでした。同室の先輩が男性合唱団の幹部だったので、すぐ入団が決まりました。当時の福島大学には「三者自治」の精神というものがありました。教員・職員・学生がそれぞれの立場から大学の自治・運営にかかわってゆくというものでした。そんな環境の中で自治会活動もずいぶんやりました。

(2) どんなことに関心をもって院に進んだのか。

2年生の時、マルクス経済学原論のゼミに入り、『資本論』の本格的な勉強を始めました。『資本論』『剰余価値学説史』などの原典講読が中心でした。聴いてみたいと思った講義以外はあまり出席しませんでした。ゼミの勉強だけは一生懸命やりました。正規のゼミ以外に、ゼミ生だけでサブゼミを毎週やっていました。後輩に教えるということがよい勉強になりました。ちょうどその頃、福島大学の教員を中心に資本論研究会が発足して、『資本論の研究』全5巻の出版が準備されていました。また当時は様々な経済学論争が繰り広げられていて、どの教員もそれらに何らかの形でかかわっていました。そういう活気のある雰囲気や学問や研究に対する関心を高めてくれたのではないかと思います。4年生になって大学院進学を決めました。もっと勉強したいと思ったからです。将来研究者として職が得られるかどうかはあまり考えませんでした。私の所属していたゼミからは、すでに多くの先輩が大学院に進み、研究者の道を歩んでいました。尊敬する先輩もたくさんいて、自分もその仲間に入りたいと思ったわけです。

(3) 大学院生活はどうだったか。

修士課程は福島大学の大学院で学びました。4~5人の小さな大学院で、都会の大学院に比べると知的刺激は少なかつたかもしれませんが、私の性には合っていました。研究テーマは、学部の卒業研究の延長で、マルクスの恐慌論としました。古典派恐慌論批判という視点からマルクス恐慌論の論理構造を明らかにしようとしたのですが、とにかく苦しかったです。しかも、苦しんだ割にでき上がりはさっぱりで、先輩たちがすぐに活字になるような立派な修論を残していたことと合わせて、落ち込みました。にもかくにも修了させてもらったのち、北大の博士課程に進みました。こちらは規模も大きく、しかも総合大学なので経済学以外の研究科もあり、福島では得られなかった刺激や経験を持つことができました。北大では助手の3年間を含め6年間過ごしました。

(4) 現在の研究テーマ

いま私自身が取り組んでいる研究は大きく2つあります。ひとつは、1830年代から40年代のイギリスに登場した「貧民の被救済権 right of the poor to relief」論者の経済学の再評価です。マルサス人口論をめぐる論争を整理しようといういろいろな文献を読んでいた時に、「貧民の被救済権」をひとつの自然権として主張した経済学者たちがいたことを知りました。「貧民の被救済権」の主張とは、人々が自らの労働で生きるに十分な生計の資を得られないとき、彼らには社会に対して救済を求める権利がある、というものです。このような権利を主張することと経済学の立場とは水と油の関係に思えたものですが、いったいこの経済学者たちはどんな経済学を展開したのだろうかという素朴な疑問が湧き、彼らのものを集中的に読みました。彼らは非常にマイナーな経済学者で、概説的な経済学史のテキストには登場しないのですが、古典派以降の経済学の展開を理解する上で、また福祉国家論の源流の一つとして重要な意義を持っていると思っています。もうひとつの仕事はマルクスに関するもので、マルクスの手書きの草稿を活字にし、MEGA2(新マルクス・エンゲルス全集)として出版する事業に参加しています。



経歴
1955年 北海道小樽市に生れる
1980年 福島大学経済学部卒業
1983年 福島大学大学院経済学研究科修士課程終了
1986年 北海道大学大学院博士後期課程単位取得退学
1986年 北海道大学経済学部助手
1989年 釧路短期大学講師
1995年 北海学園大学経済学部助教授
1998年 同教授 現在に至る

主な研究業績
『マルサス人口論争と「改革の時代」』(2001年11月、日本経済評論社)『古典派恐慌論』(1998年2月、富塚良三・吉原泰助編『資本論体系9-2 恐慌・産業循環(下)』有斐閣、所収)『ロンドン・ノートにおける人口論研究』(2002年6月、『経済』No.81) (共訳)『資本論草稿集翻訳委員会訳』『マルクス 資本論草稿集 2 1857-58年の経済学草稿 II』(1993年3月、大月書店) (共訳)『資本論草稿集翻訳委員会訳』『マルクス 資本論草稿集 9 経済学批判(1861-1863年草稿 VI)』(1994年3月、大月書店)など。

現在の研究テーマ
「貧民の被救済権」論者の再評価 マルクス経済学草稿の研究

学生諸君へ

多くの人が言うように、百分から求めなければ、大学は何も与えてくれません。積極的に人との交流を求めてほしいと思います。一人でできなくても、2人3人と集まればいろいろなことにチャレンジできます。大学で学ぶ目的は皆さんひとりひとりが考えねばなりません。経済学の知識そのものを習い覚えるということも大事ですが、多くの学生を見ていると、それらの知識が断片的なものにとどまっているような気がします。それらの知識を自分自身の世界観に高めていくことが重要だと感じます。世界観というと大げさですが、世の中も見る眼、あるいは世の中で生きていく姿勢です。そのような眼、姿勢を鍛えてほしいです。

研究室の窓から

今年度からは、青年の雇用・労働問題を主たる調査・研究テーマの一つにしたいと思っています。就職についていろいろな意味で苦労している学生たちと向き合う中で、これは腰をすえて取り組まなければと今回のプロジェクトを企画しました。そのへんの問題意識を今日はお話ししたいと思います。

①「標準」の揺らぎ

「自分がどんな仕事に向いているか早くに理解すること。そして、その仕事に就くために必要な資格や能力を早くに身につけること」、そんな助言を受けた経験はありませんか？

これまで、学校から仕事への移行の「標準」というものは、在学中に就職活動を開始して内定をもらい、4月から晴れて「正社員」という身分で働きはじめるというものでした。また、就職してからも、長期雇用が保障されるもで、働きながらいろいろな能力を身につけて一人前に育てられていくのが「標準」でした。

ところが、こうした従来の「標準」が揺らいでいます。皆さんもご存知でしょう？ 10%を超える若年層の高い失業率、膨大なフリーター層、就学・就職・職業訓練のいずれからでも遠ざかっているNEETと呼ばれる層の拡大、自立の困難・親の家計への依存(バラサイト)等々若者の就職・仕事・自立をめぐるネガティブな情報はいやというほど耳に入ってくるでしょう。

②様々な「対策」の推進

こうした事態を前にいま、就職に関する様々な「対策」が開始されています。学校機関においてもそうです。インターンシップなど就業体験や資格取得の機会を設けたり就職セミナーを実施する高校や大学が増えています。とくに本学におけるその取り組みは高い評価を得ています。漠然と就職活動をはじめ、就職というより「就社」していた学生のこれまでの現実を考えると、仕事や働くことについて考える機会にもなるこれらの取り組みは望ましいものであり、皆さんにもぜひとも積極的に参加してもらいたいと思っています。

③こんな心配、杞憂でしょうか？

しかしながら他方で、心配していることもあります。というのは、そもそもいま若いひとの就業の機会(とりわけ働き甲斐があったり、安定した就業の機会)が著しく減少しているというこの事実は社会全体でしっかりと認識されているのだろうか？ そしてその問題の解決にむけた取り組みはきちんと実施されているのだろうか？ ひどを育てることの重要性は企業や社会全体の共通認識になっているのだろうか？ それなしの、「シュウカツを急げ!」「勝ち組たれ!」との常時の叱咤激励(?)は、学生をプレッシャーでつぶしたり能力の不足を「自覚させ」て就職を早期におきらめさせることにならないだろうか？ そんな心配があります。

④就職してからの問題は どうする？

さらに、上記の「対策」が就職を目的としたものである以上、これはある意味ないものねだりになってしまうのかもしれませんが、就職してから皆さんが直面する様々な問題への対応策は学校を含むどの機関でもほとんど教えられていないのではないのでしょうか。

例えば、せっかく就職を果たしたとはいえ、それが一年契約の不安定な雇われ方だったというケース、周囲のサポートのない中で「即戦力」として過重なノルマを課されて燃え尽きてしまうといっ

今号からの新企画「研究室の窓から」では、いま先生たちが取り組んでいる研究テーマや実践について報告してもらいます。今号は川村先生(労働経済論)の報告です。

たケースは、大学関係者であれば、自分の教え子のこととしても、少なからず耳にすることです。私の世代に関してこそそうです。民間に就職した友人と集まったときには、必ずといってよほど仕事のしんどさ話か飲み会の肴になり、誰が一番不遇かを競う(?)ことも少なくありません。

⑤まずは地味な取り組みから

そんなわけで、こうした青年の雇用・労働をめぐる様々な問題に対して、長期的なビジョンをもって、まずは小さな試みを開始しようと思っています。その試みとは、働くことについての具体的なイメージがない中で就職に向けて半ば脅迫的に追い立てられている学生に対して、働く楽しさやその一方でしんどさ、そして嫌なときは仕事をやめることも可能だけれども仲間と一緒に職場をよりよいものにして働き続けることもまた可能だということ、年齢が比較的近い現役の青年労働者(労働組合)自身に話ってもらうことです。

これは、「君たち、甘えちゃイカン」という青年労働者による上からの説教ではなく、仕事・働き方・将来について自分自身が多かれ少なかれ悩みをもって働いている青年労働者との等身大の言葉での交流であり、よりよい働き方・生き方をお互いに考え練り上げていく、そういう営みにしたいと考えています。

⑥皆さんの参加を待っています

この取り組みを皮切りに、アルバイト学生や現役青年労働者を対象とした大規模調査の実施・ITも駆使した、就職や仕事をめぐるネットワークの拡大・現役青年労働者や労働組合による学生の就職活動の支援(「仕事の合同説明会」)・そしてこれらの活動を通じた不断の学びあい等々、問題意識を共有する諸先生方とともにこのプロジェクトを展開してゆきたいと考えています。そして、当事者である皆さんにも、このプロジェクトの一翼を担うものとしての参加を心から呼びかけたいと思います。

「競争」「勝ち組、負け組」という言葉が氾濫しそれに共感する若いひとたちも少なくないのが現状ですが、「協同」「連帯」という、ともしれば時代遅れの古めかしいと思われるかもしれないそんな生き方も意外に悪くない、むしろ大事なんだということを知ってもらう機会にもなればと思います。

「働くことは…」

「働くことは…」

「働くことは…」

「働くことは…」

「働くことは…」

「働くことは…」



econ. 2005

北海学園大学経済学部報 エコン No.11

カナダ交換教員体験記

野崎 久和

本年1月4日から2月20日までの約7週間、交換教員としてカナダのレスブリッジ大学に赴任し、学部学生を対象に、「現代日本経済」に関する講義を13回にわたって行ってきました。厳冬のレスブリッジでの生活は大変でしたが、そうした苦労を遥かに上回る有意義な経験ができ、半ば後ろ髪を引かれるような気持ちで帰国しました。たった7週間の短期間でしたが、カナダ滞在を通じて思ったことを数点述べたいと思います。

①カナダは大きく広い

日本に比べ、国土面積が26倍、人口が4分の1のカナダは、生活実感として非常に大きく広く感じました。大学のあるレスブリッジ市は、カナダ・ロッキー山脈の東側の台地にあり、米国との国境まで約100kmの場所に位置する、人口7万人強の地方都市です。市の中心地から車でわずか20分ほどの郊外に住んでいる、現地大学関係者の家族を訪ねる機会がありましたが、彼等の自宅の敷地は2エーカーと、札幌ドームの約1.5倍もありました。その家では、朝日が地平線から昇るのが東の窓から見え、夕日が遠くのロッキー山脈に沈むのを西側の窓から鑑賞できるそうです。また、市はずれにある別の家族は、奥さんの趣味で敷地内に馬を飼い、庭で乗馬を楽しんでいるとのことでした。

地方の一小都市とはいえ、こうしたスケールは生半可なものではないと思います。大きな空と、四方八方を取り巻く地平線やロッキー山脈を毎日見ていると、人間おおらかになるのかも知れません。大学も広々としており、キャンパス内では野生の鹿もよく見かけました(コヨーテや狼が出てきたこともあると聞きました)。こうしたキャンパスは、特にアウトドア派の人には願ってもないような環境だろうと思います。また、校内では、図書館や体育館、劇場兼コンサート・ホール、カフェテリア等々の公共スペースが広く、学生や教職員に心地よい空間を与えていました。

②平和志向でリベラルなカナダ

カナダにはかつて二度行ったことがあり、その時に「平和志向でリベラルな国」との印象を受けましたが、今回もそうしたイメージを持ちました。例えば、カナダのマーティン首相は、米国ブッシュ大統領の再三の要請にも拘らず、国民の声を反映して、イラクへの派兵は行わず(アフガニスタンには派兵)、またミサイル防衛(MD)構想にも参加しないと表明しました。カナダは、米国と長い国境を接し、貿易の約8割を米国に依存し、共同防衛体制を敷いているにも拘らず、こうした独自の外交・防衛路線を展開していることに少なからず驚きました。また、マーティン首相は、「政教分離の原則」を強調し、同性婚を容認するなど、これまたブッシュ政権とは異なった方針を打ち出していました。こうした状況を反映してか、最近

ではブッシュ政権下で右傾化・保守化している米国から、カナダに移住を希望する人が急激に増えているそうです。

③大学生は真剣、かつ学生生活をエンジョイしている

学部学生が受講している講義は、週に4から5コマ(半期ベース)で、講義の予習や復習に忙しく、アルバイトをしているような余裕は余りないようです。少人数制ということもあると思いますが、講義に臨む学生の姿勢は真剣そのものです。講義開始前には全員着席し、講義中に退室や、居眠り、私語をするような学生はいませんでした。また、質問によく答え、討論に積極的に参加する学生も多数いました。講義は総て英語で行いましたが、完全ではない私の「英語」による話に対しても、彼等は真剣に聞いていました。こうした学生を相手にしていると、教え甲斐も一段と増します。

カナダでは、学期末には学生の方が、受講した講義の「評価」を行います。何やら、「講義には真剣に望むから、いい講義をしろよ」と、学生から暗黙のプレッシャーを受けているような気もします(幸い予想以上により評価をもらって、ホッとしましたが)。学生による評価は学部長に届けられ、その評価も参考にして、学部長は各教員の査定を行うそうです。厳しい世界です。

学生は、講義が終われば、友人とカフェテリアで語り合う者(大きな笑い声がよく聞こえる)、部活やサークルに行く者、また大学のスポーツ・ジムで汗を流す者など様々で、日々生活をエンジョイし、メリハリのある学生生活を送っているような感じを受けました。

私は、今回のカナダ滞在以前にも、米国と英国に住んだことがあります。海外に住めば、その国のことはよく分かります。と同時に、日本のことをよく考えるようになります。今回カナダに滞在して、少子高齢化、保守化、対米配慮偏重化、経済不振長期化、財政悪化が目立ってきている日本に対し、改めて懸念を覚え、何をなすべきかを考えました。

海外のことを知り、日本のことを考えるためには、留学は非常にいい機会を与えてくれます。また、色々な国の人々とも知りあえ、諸々の文化や国々の共通点・相違点に気付くこともできます。こうした経験は、チャンスがあるなら、感受性・柔軟性に富んでいる若い内に是非とも経験してもらいたいと思います。

見^魅せます！ 大学生生活のあれこれ。

campus
Life!!

前期 学年暦

- 4月 ガイダンス、履修登録
- 5月 ゴールデンウィーク
- 6月 ソフトボール大会・東北学院大学定期戦
- 7月 第1学期授業終了、定期試験
- 8月 学生討論大会、夏季休業開始

履修登録

4月にはさっそく授業の履修登録がある。自分が勉強したいことは何なのか、シラバスをみたり先輩からの助言も得ながら、じっくり考えて、履修届けを提出しやすいように。何やて？ 単位がとやすいのはどの授業かやて？ アホ言うたらあかん、そんな態度で授業を履修しても単位はとれへんで！ しっかり勉強せんとあかんぞ。(鬼教授より)



ソフトボール大会

1部経済学部のゼミナール対抗で6月中旬から下旬の間で開催しています。参加費は1人500円。賞金や参加賞もあり！でも一番のお奨めの理由は、ゼミのみんなが仲良くなれること！先生方も（年甲斐もなく）ちゃっかりと学生にまじってプレーしています（笑）。詳しくはゼミの時間や4月下旬の代表者会議で。（経ゼミ協より）

学生討論大会

学生討論大会なんていうとちょっとアカデミックなおいを感じませんか。8月には北海道・東北地区の、12月には全国の学生討論大会が開催されており、毎年わが北海学園からも参加ゼミがあります。討論大会への参加を通して、思いもよらない隠れた力（パワー）が発揮できたり、新しい友人ができてきたり、とっても楽しいです。さらにさらに！今年度は学内での討論会も初めて開催する予定です。学生同士で討論をしたり、私達の学習成果を発表する場として、現在、企画を考案中です。みんなの要望を盛り込んでいきますので、企画段階からの参加を待っています！（経ゼミ協より）



十月祭・大学祭



十月祭とは、その名の通り10月中旬に4日間にわたって行われる学園祭のことで、今年で54回目を迎える、とても伝統のあるお祭りです。十月祭では、玄関前にステージを設置してたくさんのお客様のステージ企画を行います。去年は十月祭のはじまりを飾るオープニング、もちまき、よさこい、締めを飾るエンディング等々がステージで行われました。さらに体育館ではスポーツ大会が開催され白熱したフットサルゲームが展開されました。さらにさらに十月祭のメインであるライブには、これまでに175Rやコブクロ、ジャパハリネットが登場。大変な盛り上がりでした。さらに×3、十月祭は企画モノだけではありません！個性あふれる出店・露店の数々が大人から子どもまで楽しめます。今年の十月祭についてはただいま検討中ですが、去年よりもグレードアップしたものをみなさんと一緒につくりあげてゆきたいと思っています。よろしくお祈りします！（十月祭実行委員会より）

後期 学年暦

- 10月 大学祭（十月祭）
- 12月 冬季休業開始
- 1月 第2学期授業終了、定期試験
- 2月 春季休業開始
- 3月 卒業式



卒業式



4年という時間（ひとによってはもう少し延長あり）はあっという間。恩師との別れに涙するものあり、親友と抱き合って互いの卒業を祝うものあり、授業にろくにみずく一体俺は何をしていたのダと呆然と振り返るものあり……様々な思いが交錯する卒業式。まがりなりにも諸君はこの4年間を、多めに学んで多めに遊びぬいたのだ。諸君の門出を心から祝福する。諸君の前途に幸あらんことを！



経済学部で成績が最優秀で表彰された小西由佳さんです。新入生へのコメントは、『私は、部活は吹奏楽部、バイトもお弁当屋さんでしながら、勉強も一生懸命してきましたが、両立できました。そのコツは、集中力だと思っています。』

定期試験

定期試験前。それは、学園生がもつとも勉強し、それまで閑散としていた講義室に学生があふれる時期（えッ、こんなに履修していたの!?!）。そして、真面目に講義に出席していた学生のノートがもつとも輝く時期。コピー機の前には学園生があふれ、活発な複写活動が行われる時期。言い換えれば、友人ネットワークをどれだけ築きあげていたかどうかで明暗の分かれる、そんな時期……

※実際には、出欠を評価の対象にしていたり、試験の際には自筆ノートしか持込を許さない先生が多い。やはり真面目に講義にでるのが単位取得の一番の近道といったところか。

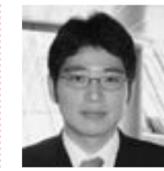


スタッフ紹介 STAFF



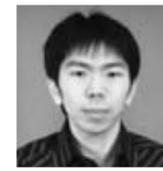
高原先生
担当科目
地域経済論

私は典型的な団塊世代の一人で、大学時代も紛争まっただ中に卒業しました。生まれは広島ですから、野球は広島カープ、好物は広島お好み焼きに日本酒です。ただ、サッカーはコンサドーレが良いと思っています。地域経済学科の発足と同時に、本校に赴任しました。専門は地域経済学ですが、これまでは東京を頂点にピラミッド型に形成されてきた日本の地域システムについて実証的に研究してきました。その結論は、ヒト・モノ・カネなど富が東京など大都市に集中し過ぎてしまい、それが21世紀の持続しうる発展への桎梏になっているということでした。それを脱却するには、それぞれの地域の自立的発展が何よりも重要です。現在は、そのために、北海道のみならず、全国そしてるかヨーロッパのイタリアまで足をのばしてフィールドワークを進めています。地域の現実の中にこそ自立の芽があるという信念に立って今日も全国様々な地域を歩いています。院生や学生とも日本全国そしてイタリアを踏破しています。「学ぶとは誠実を胸にぎざむこと、教えるとはともに未来を語ること」（ルイ・アラゴン）



浅妻先生
担当科目
経済政策

私は、地域レベルでの環境と経済の政策統合を視野に入れた経済政策研究を行っています。具体的事例として日本の大都市圏臨海部を対象にしています。日本では石油化学などの素材型産業がコンビナートとして大都市圏臨海部に集中して立地していますが、現在は雇用吸収力の低下や広大な遊休地が発生するなどの問題があります。また、このエリアは、環境負荷の高い素材型産業や、増大する道路・自動車交通が原因となって深刻な大気汚染公害が発生するなど環境の疲弊に長期的に直面しています。地域経済を支えうる環境保全型の産業への転換・育成を行っていくことはもちろん、交通の適切なマネジメントや遊休地などを活用した良好な環境の復元・再生を行うことがこの地域にとって重要な課題になっているのです（環境再生の課題）。その中で、グローバル化に対応して激しい再編が進む素材型産業の利害と、地域産業政策や国の都市再生政策など広義の経済政策との関わりについて重点的に研究しつつ、上記の課題をふまえた環境経済政策がどのようなものであるかを検討しています。その他に、自動車リサイクルの制度設計に関する研究も行っていきます。



越後先生
担当科目
多国籍企業論

毎年新しく入学する学生に、「経済学部に入って何を勉強したいの？」という質問をしますと、「これから見つけたいとおもいます」という答えが返ってきます。そして、入学後一年が経過した時点で、「勉強したいことは見つかった？」と聞きますと、「何をしたいのかわかりません」と多くの学生は答えます。いうまでもなく大学とは、小・中・高校と異なり、自主的に勉強する場なのですが、それほど自分が学ぶ問題を設定することは難しいことなのでしょうか。「経済学」というと、貿易、株、為替といった、普段の生活とはそれほど身近にはない問題を連想するから難しくなるのだと思います。経済学が扱う根本的問題は「取引」であり、わたしたちの生活行動すべては、取引行動であるということが出来ます。つまり、わたしたちの身の回りにある多くの事柄は、経済学で用いられる考え方で分析ができるのです。ですから、自分がこれから勉強する課題は、「何にしようか」と改めて考える必要はなく、「いま一番関心があること」に設定すれば良いのです。

ホームページで学部情報を!!

ホームページ上 (<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/econ/>) では、今回紹介した先生のほかにも、数多くの先生が研究内容を紹介しています。また担当科目の講義概要へのリンクも張ってあります。つまり、どんな先生がどんな講義をしているのか、どんなことに関心を持っているのかを知ることができます。是非、講義やゼミの選択に活用してください。

